

本地本門の總括佛教となるのである。

佛教として最後の目的たる即身成佛の功德は、獨り本地本門の教觀にのみ存して、熟脱を教へて滅私の模範を示す。是即ち、國民日蓮の職域分擔にして、日蓮の宗團は此の意味に依つて存在するものである。

## 第二 佛教圈内としての存在意義

久遠本地の本佛は、常修常證、常滿常顯にして、本因妙の信位に居し、信行名字の事觀を成し、本地本門の總在本尊を確立して、三世常恒に信謗二類の衆をして總要本尊の功德たる本地本門の經力を以て、下種即成の妙益を示し、順逆二縁の衆生は、共に、本尊の功德力を蒙つて、一世と三世に即成を顯はす。是偏に、總要本尊の功德力に依るものにして、皇國佛教の本質たる下種化導、凡体口唱の信位成佛を強調するものにして、信は一世に即成し、不信は三世流轉の實類の相を示す。權者權現應

作の化導は示九道身して久遠下種の覺諒に盡し、在世に應化して五時に涉つて四教を説き雖脱在現具騰本種して久遠下種の本處に還り、最後身の凡体となつて、口唱信行の名字に還り、本化の一類となり、迹佛迹化の化導の教義に下種の功德なしと談ずるのである。諸佛の說法は廣しと雖も、詮を取つて云へは、下種の一妙に納まり、化導の終始は漫荼羅本尊の体内教相として存在せるを知るのである。法に約して下種の要法、人に約して名字信行の本因妙の凡体。行を以て説く時本因下種の要法口唱の一行となる。是即ち、總在本尊の功德にして日蓮弘通の信行觀心の宗旨となるのである。

## 第三 所 結

日本人としての心構は一億一心と云ふ時、日本人の「三ツ兒の魂」として、是無くしては日本人たるの資格が無い譯である。

日蓮門下として、我が皇國臣民たる以上、又此の線に副ふて宗團を結成してゐる筈である。確かに日本人である筈であるから、日本精神が主体となつて、翼賛宗教を建立する、そこに日蓮門下の宗教が存在するのである。此の精神が第一義であり、かくして皇國宗教があり下種益佛教が存在するのである。

此の点に留意して、以上の義を觀察せねばならぬ、佛教圈内としては法に約して云ふ時は一妙の高廣にして、もごより因果は一体にして、一佛の内證、外用の相貌として、化導の上に二名の尊稱を付す。脱益化導在世に於ては釋尊の名を以て一世の教主となし、人法一体の上に本果實證の妙名を詮出して以脱還種の教義を説き、本因、果、種の要法はやがて本因妙に下つて教彌實位彌下と釋して、法より云へば從一歸一の總名の要法であり、人より見れば最下の凡師たる日蓮と名づく。

佛教圏内の最高權威者たる日蓮は、皇國体の上より云へば、皇國日

本の臣民として、先づ國家の隆昌を祈つて、三大誓願を立て、立正安國の故に四箇格言を以て時代思想を打破し、本地本門の總名本尊を弘通し、皇祖神の御總攬下にあつて、臣道實踐の上に翼賛宗教として、下種益佛教たる日蓮の教團を樹立し、八紘爲宇の實現を期し、以て、立宗の精神となす、茲に一億一心の線に副ふべき宗團が建立される次第である。

然るに、釋迦佛を中心としては印度佛教としての存在であるが、皇祖神を中心とする日本佛教ではなく、又、下種益佛教ではない。

日本臣民として一億一心と云ふ日本精神は皇祖神が中心であつて、皇祖神の御總攬下にあつて、一億一心、一丸となる。此の線に副ふてこそ日蓮が如くするのである。日蓮の立宗の大精神は茲に發祥し、國体明徴を以て第一義となし、國民指導の根幹となす、日蓮の教團は此の意味に依つて存在するものである。

以上

## 日本民族の宇宙觀に就て

日本民族の持つ特有の宇宙觀は、別天神と神代七世の神々の御名と、神々の御行動が、眞に宇宙の眞理を開顯する事であり。皇祖神は其の儘に御表現遊ばす御方に在します。

天孫の御降臨は、高天原の理想實現の爲であり、神武天皇様の建國は、その實行を示すものである。

本書第一編は此義を要説したものであるが世人或る一部に於ては、それは日本人であるが爲めにしか云ひ得る事ではあるが、若し世界各人種の上に及ぼすに於ては、この日本民族の宇宙觀は通用しないと云ふ結果になりはせぬか、と云ふ説を爲す人達がある。

これ等の人達に……日本民族の宇宙觀なるものが如何に雄大にして、且つ見事なる理論と實踐が相伴いつゝあるかを自覺し、而して世界文明の統括と、其の原理に把住せられんことを曉望して止まないものである。

地質學上、又は考古學上、或は人類史上に種々なる論議が提出されてはあるが、それは

しばらく措いて、今茲では宗教方面より検討する、即ち、宗教中に現はれた宇宙觀は、それ々の宗教の持つ宇宙觀であつて、今世界の十大宗教に就て見るに、

- 一、猶太教
- 二、キリスト教
- 三、回教
- 四、バラモン教
- 五、佛教
- 六、印度教
- 七、ラマ教
- 八、道教
- 九、儒教
- 十、神道

但し、皇國の神道はかく相對的に置くものではないのであるが、暫らく十大宗教の列名に置くことにする。

此の十大宗教は、各自に特徴があつて、あながちに其の勝劣を決することは難事ではあるが、その創世記に見るに、猶太教では、エホバの神が全智全能として、宇宙世界の創設者となり。キリスト教ではゴットの神がそれであり。回教ではアラアの神なりと云ふにある。バラモン教と印度教では大梵天王あつて世界を造り出したものと云ひ。佛教の小乗教とラマ教も又然りである。

エホバの神も、ゴットの神も、アラアの神も、大梵天王も名稱こそ異にするが、其の神が此の宇宙世を創設した造主者であると云ふ点は同一となるのである。

道教と儒教は其の説は異にするが、易經の説も老子經の説も自然説に落つく同義と考へらるのである。

これ等の宗教に説かるゝ宇宙觀に對し、文藝復興時代、即ち西曆一四五三年の羅馬帝國の滅亡已後百年間に起つた人間の自覺を重点とする運動が、漸次に盛り上つて来て、やがて「神が創造したと云ふ宇宙世界の創世記」に反對論が説かれるやうになり、其の人達が獨斷的な立場より、又は懷疑的に、或は批判的に、近世哲學の各説を産み出したのである。各宗教哲學として存在する創世記なるものはいづれも神なる原理の作爲の不思議に立脚して其の神祕なる考察のみに形成せられたものである。

若しそれを原始宗教に求める時は、驚異の神觀が根本となつて、全般的に信仰化されたものか、或は、隨喜的に全般化されたものが其の原始宗教となり、古代に於ける萬有神觀即ち自然神の信仰が多神教となり、汎神教となり、又單一神教か唯一神教となる。それが現在の猶太教であり、キリスト教となり、回教となつたものであると云ふにある。

此の故に宗教哲學なるものは、假定に依るものなりとして、宗教そのもの、發生原因を

認めてゐる次第である。

此の故に宗教として一神教であらねばならぬ筈であるものは、其の善的方面を強調する時は、其の對立たる惡的方面をも認めぬわけには行かぬ。……茲に一神教の原理が分裂して善惡二神の對立する處に二神教が成立することになる。

それが即ち、宗教が假定を基礎とするが故にかゝる現狀を呈するものなりと説くのである。

又一神教として見る時は、その神なるものどこの世界とは、其の關係に於て神がこの世界を創りたるものなりと云ふ時は、神は全く此の世界の外にある處の實存なりと云はねばならぬことになるから、随つて、神と世界とは自ら二箇の實在となる。而して、神は此の宇宙の内的原因となる論據を見出し得ざる限り宗教哲學の説く處は重大なる缺點を有することになると論破してゐるのである。

かくして近代哲學者の説く處は、極端なる議論ではあるが、未來崇拜を捨てし現在生活の上に一切を求めることになり「その存在の有無さへ判然せぬ未來世の爲めに此の現世の

生活を犠牲にする事の何ぞ愚なる」……と叫ぶに至つたのである。

かくして自由研究の精神と人間の欲望とが相まつて發展したその結果として種々なる發明となり、科學の進歩となつたのである。かくして人間としての自然の生活に移りつゝある時、彼のルーテルの宗教改革運動が起つたのである。

文藝復興運動なるものは人間本意の運動とも云ひ得るのである。猶太教やキリスト教の神本意の宗教が人間の自覺を本位とする運動となつた、是が文藝復興の運動である。

此の神本意の運動と人間本意とが歐洲古來の文明を縦貫せる二大思想であつて、神本位とする處に其の發生地に依つて「ヘブライズム」と呼び、人間本意とする處に「ヘレニズム」と呼んである。ヘレニズムとは、希臘主義である。希臘の主義は人間本位として説かれてゐる、而して復興とは、ラテン分學への復活を云ふのである。

羅馬法王のもとに繁の世界を説かれてゐたが、一度宗教改革となり、復興運動となつた爲めに、未來信仰の靈的哲學が現在信仰の肉的信仰となつた、靈の上に束縛された思想が解放されて肉的本意の現世信仰となつたのではあるが、人間の性格として、只肉の享樂の

みに満足するものではなく、やがて靈に對する信仰も復活されて行く、靈と肉との信仰と争点は、又イブセンの第三帝國となつて顯はれたのである。

イブセンは西紀一八二八年に生れ、その云ふところの第三帝國とは、其の作たる「黃帝とガリラヤ人」の中に説かれてある。黃帝に比した古き希臘の神の信仰とガリラヤ人として現はしたキリスト教を取扱ふたものであつて、第一帝國とは知識の樹を基礎として建てられたものであり、第二の帝國とは十字架の樹を基礎として建てられ、第三帝國とは靈と肉との合致の境を指すものであつて、靈の世界でもなく、肉の世界でもない、この二つの世界を超越した第三の世界を理想とするのである。

靈肉一致の第三帝國の現出を理想とするイブセンの理想世界は、單なる肉的世界である知識慾のみでは満足出来るものではなく、然りと雖も、單なる靈的信仰でも満足出来ないこと云ふ、幾多の哲學者の検討を経て靈肉一致の境界を要求する事となつたのである。

文藝復興運動以後の各種の主義を透して検討せられた西洋哲學なるものは、靈より肉に更に、肉より靈となり、遂に靈肉一致の信仰が樹立されたものなりと考へられるのである。

而して、物質的なる西洋哲學と、精神的なる東洋哲學とに就ては、タゴールの批判は見のがせないものである。

要は、今茲に思想史の全面に涉つて説かんとするにあらず、各宗教の經典に顯はれてゐる宇宙の創造説を検討して、其の説の不可なるを論結せる、所謂近世哲學の所論を擧げて參考に供し、其の何れの所説が正見なり哉の結論は、これ又暫らく別問題として、我等は我等の信念を披瀝しやうと思ふのである。

我等の信するところでは、宇宙の大法界は宇宙の大法界であつて、造物者があつて創設したものとは考へられないと共に、各哲學者の説にも又信を置く事が出来ないのである。

皇國日本の神ながらの道に顯はれた宇宙觀と人生觀、そして國家觀なるものは、神世の神が造られた宇宙だとも仰せられてはゐないし、民約若しくは君民協約の國家だとも仰せられてゐない。神ながらの道を以て建國法と信じ皇祖神を宗祖と仰ぎ奉り、天皇を現人神と信じ奉つて、天皇即國家と信じ、天皇即國家を前提して、天皇に歸一し奉る上に國民即國家也と觀する。君にして父にましますと信じ奉る、即ち君父同源の國體觀は世界無比の

國體觀であり、それが直に皇國々體の本質である。

かゝる目出度き國體は、世界の何處を尋ねてもあるべき筈がなく、求めても得られることではない。獨り皇國のみが有する特有の國體である。

文明の光輝をもたらす宗教として、其の宗教の教義の根本となる宇宙觀が、既に創設の神を前提して、神の造りたる宇宙であり、世界であること云ふ教と、我が、神ながらの道の古神道に顯はれてゐる宇宙觀とは、全く以て同一觀なりとは云ふを得ないのである。

宇宙の眞理は、獨り我が古神道のみが有する日本民族の宇宙觀のみが世界に冠たる宇宙觀であると共に、此の宇宙觀を有する爲めに世界無比の國家觀となり、更に世界に冠たる國家觀となり、宇宙觀となるのである。

翼賛宗教とは、皇國體の明徴にある事は論を待たぬところであり、宗教家として職域奉公の分擔はこれを使命の本分とするのである。皇國臣民日蓮の説く本地本門の法華經は、正しく皇國日本の原理を宗教化して説くものであり、法華經の行者としての日蓮の大精神は臣道實踐の故に、職域分擔滅私奉公の意味に於てのみ存する死身弘法の精神である。

立宗の要義も、指導の精神も、此の大精神を離れては何ものゝ存在もないのである。  
本書は此の意義に立脚して編纂したるものである。

(詳細は別に發表することにして今は編者の意志を述べて置く)

昭和十七年十月三日印刷  
昭和十七年十月十日發行

定價 金貳圓

編輯兼發行者代表 大阪府堺市櫻之町東二丁目三番地 北田秀達

發行所 大阪市天王寺區西高津中寺町十七番地妙興寺内 國體教學研究室 電話南三二九三番

印刷人 京都市中京區烏丸通丸太町下ル東側 夏地富三郎

印刷所 京都市中京區烏丸通丸太町下ル東側 夏地調文堂 電話上④四一七七番

420  
403



終

